パトゥル・リンポチェによる大・中・小の『現観荘厳論』註の先後について

石　川　美　惠

0．はじめに

リメー（超宗派運動）の実践家であり遊行の成就者であったパトゥル・リンポチェ（dPal sprul rin po che），即ちオギェン・ジクメ・チューキワンポ（O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po, 1808-1887）[1]の最も有名な著作は，ゾクチェンの加行をわかりやすく解説した『クンサン・ラマの教え（*Kun bzang bla ma'i zhal lung*）』だが，彼は顕教の学者でもあり『現観荘厳論』に対しては大（PP）・中（PB）・小（PGR）の複註も著している[2]．

チベットにおいては専ら，ハリバドラの『現観荘厳論』小註（MNg）に対する複註が作られており，パトゥルの三部の複註もすべてこの小註に対してなされている．

筆者はこれ迄，MNg に対するパトゥルの註釈書のうちの「大」に当たる PP（以下『概説』）の科文と，それとは別にまとめられている MNg の科文集（PS）と，チベットにおける MNg の複註 9 書を比較し，これらの関係を調べた[3]．それにより，他とは明らかに異なる構成を持つ，ゲルク派の宗祖ツォンカパ（1357-1419）とパトゥルの科文の相似が明らかとなった．

リメーの実践家とはいえ，パトゥルが他派の宗祖の代表作の一つに深く依拠して自説を展開するということは，ゾクチェンの行者としての側面から考えると大変興味深い．

筆者はこれに着目し両者の関係を調べるため，MNg に対するパトゥルの註釈書のうち「小」に相当する PGR（以下『修習次第』）の全訳を試みた．その結果，その奥書には「聖者ヴィムクティセーナの真意をツォンカパ尊者が解明したのに従って，短い概論をこのように書いた」（PGR 226.7-8）とあり，『現観荘厳論』の註釈に関して，パトゥルがツォンカパに敬意を表していたことの裏付けが得られた．

パトゥルの『修習次第』に関する限り，実践（四加行）に重きをおいた論書となっているため，ツォンカパの『善説金鬘（*Legs bshad gser phreng*）』（abbr. LS）の描写をそのまま引用することはないが，その解釈を踏まえながら，『修習次第』を『現観荘厳論』の実践の手引きとして再構成していたことが明らかとなった．

引用に関しても，LS だけではなく，ツォンカパの『菩提道次第大論』（LRB），同『小論』（LRS）を参照していると推測できた．少なくとも，過去の高僧達の『道次第（*Lam*

rim)』を念頭に置いていたことは，『修習次第』の中で説かれる次の一文からも明らかである．

「後の世代で大乗の典籍〔の内容〕と〔そこに説かれる実践の〕道を間違いなく実践しようと思っている幸運な人々は，凡夫の地においても初めは『入菩薩行論』など初心者の心の訓練（blo sbyong）と〔実践〕道の次第（lam rim）に依拠して，自らの心相続が革と矢のように堅くて曲がらないのを〔和らげ曲げる〕ために，打ったり，真っ直ぐ伸ばしたりする〔と良い〕.」（PGR 221.5-10）

パトゥルはシャーンティデーヴァの『入菩薩行論』（PJ）の講義で名高く，彼が講義をするとチベットではあまり見ないような多弁の黄色い花が咲き誇った，という逸話があるほどだが[4]，その『入菩薩行論』と同様に lam rim（もしくは著作としての高僧達の *Lam rim*）に依拠することを，後進に勧めていることがわかる．

これらを踏まえて引き続き，パトゥルが『現観荘厳論』に関してツォンカパの思想をどのように取捨選択したのかを探っていくため，パトゥルの註釈のうち『現観荘厳論』の術語の語義解釈を行った「中」（PB）の翻訳も企図している．

本稿では，パトゥルとツォンカパの著作との関わりを調査する一環として，そもそもパトゥルの三部の註釈はどのような順序で書かれたのか，という疑問のもとに，出来うる限りその先後関係に迫りたい．仮に先後を知ることができれば，上述の三部におけるツォンカパからの引用や思想的影響を抜き出し，註釈の先後によってツォンカパの影響は変化したのか，変わらなかったのかを含めた，パトゥルの思想的変遷，もしくは宗教体験の深化も辿れるものと考えるからである．

1．パトゥルの『現観荘厳論』関連の著作

パトゥルの事跡は，伝記（NT および Ricard 2017）からも最晩年以外は時期が明確ではない．

師匠達や学んだ内容，彼自身の講義およびエピソードは豊富だが，いつ，どのような「著述活動」をしたかは，ほぼ記されていない．

『現観荘厳論』の科文集を著し，その内容がパトゥルと酷似していた[5]直弟子のミパン（Mi pham ʼjam dbyangs rnam rgyal rgya mtsho, 1846-1912）の伝記（Duckworth 2011, Lama Yongden 2000, Pettit 1999）からも，師パトゥルの著作年代は明らかにならなかった．

そこで筆者は，パトゥルの全集から『現観荘厳論』関連の著作を抜き出し，その奥書に書かれている内容を調べることにした．

パトゥルの全集（PSB）は 8 巻から成る．Vol.1 は『伝記』（NT）を含めて計 36 点が収

載されている．以下，順に記すと，

Vol. 2：24 点，Vol. 3：31 点，Vol. 4：1 点，Vol. 5：19 点，Vol. 6：29 点，Vol. 7：2 点，Vol. 8：67 点である．

パトゥルの科文集（PS）は Vol. 2 に収載され，Vol. 3 は小品集であり，Vol. 4 は『概説』のみから成る．Vol. 5 に『般若経』関連の小品が 5 点含まれる．Vol. 6 は主にパルドやゾクチェンに関連した作品群であり，Vol. 7 のうち 1 書は『クンサン・ラマの教え』になり，ほぼこの書でこの一巻が占められている．Vol. 8 はシチェー（Zhi byed）派の祖でチュー（gCod）の行者として名高いマチク・ラプドゥン（Ma cig lab sgron）への賛歌を含む小品集である．

このうち，『般若経』に関する典籍であるとタイトルから判別できるものは『現観荘厳論』関連の 6 点（PB，PGR，PP，PS，PShC，PSh3）と『般若経』所説の二十種僧伽について書かれた小品（PSh1），『般若経』もしくは「般若」にまつわる簡単な用語集（PSh2）の計 8 点になる．

2．奥書の内容

筆者は，この 8 点すべての奥書を調べた．その結果，奥書が存在したものは，パトゥルの『現観荘厳論』註の「中」にあたる PB，「小」に相当する『修習次第』（PGR），PShC，PSh3 の 4 点であり，その他の『概説』（PP），『現観荘厳論』科文集（PS）と『般若経』の二十種僧伽を説く PSh1，用語集の PSh2 は奥書を欠いていた．

パトゥルの全集は小品が多く，奥書を欠くものが多数ある．奥書があってもメモ程度のものも多い．メモ程度のものも含めて，奥書には大まかに分けて三種類あった．それは① dpal sprul gyis gsungs so //（PSB Vol. 4, 418）等と記されたパトゥルの講話をまとめた聴聞録，② a bu hral pos ...（中略）... bris pa'o（PSB Vol. 6, 145）等と書かれたパトゥル自身の著作，③上記①もしくは②の短い記述があるか，或いは全くないが，後述する PB のように同時代もしくは後に印刷発行されたと思われるもの，である．

a bu というのは，パトゥルの家族の呼び名で[6]，PGR の奥書に見られるように彼はしばしば a bu を自称している（これについては後述する）．

典籍の著述年を確定する上で，奥書に記載があればありがたいのは②の，本人による著述の明記であり，更に著述年代が類推できる干支か，活躍年代が明らかな人物の関わりか，書いた場所などを含むことだが，それらが完備している奥書は稀である．

本稿では PB，PGR，PShC，PSh3 の奥書を取り上げ，PB と PGR の先後を読み取り得る手がかりを拾うことに努めた．

2．1　＜PB＞

まず，『現観荘厳論』の語義解釈集である PB の奥書を見てみたい．本文末尾に小字で以下のように続く．

「という，パトゥル・リンポチェによる『現観荘厳論略解　集成（mNgon rtogs rgyan gyi bsdus ’grel kun las btus pa）』〔.〕国王（sa skyong）〔である〕デルゲ法王の財務（sDe dge chos rgyal rin po che’i mdzod）という名を持つ[7]，釈迦に従う者（Sh’akya’i rjes ’jug）であるカルマツェワン・リンチェンチョクドゥプ（Karma tshe dbang rin chen mchog grub）が出版したものは，善し，善し，善し.」（PB 180, 10-13）

PB の奥書は明らかに③のタイプであるが，パトゥルが『現観荘厳論略解〔の〕語彙を抜き出したもの（集成）』であることが明記されている．

この「現観荘厳論略解（mNgon rtogs rgyan gyi bsdus ’grel）」だが，PSh3 の冒頭で

「ここで，『般若経』の小さい略解」（Shes rab kyi pha rol tu phyin pa’i bsdus ’grel cung）を並べるなら」[8]

と述べており，科文の形式が『現観荘厳論』と同じであるため，PSh3 のタイトルである *Shes rab bsdus ’grel nyung ngu* とは，*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa’i mngon rtogs rgyan gyi bsdus ’grel nyung ngu* の略と考えられる．

そうであるなら，PB と PSh3 は共通の「現観荘厳論略解（mNgon rtogs rgyan gyi bsdus ’grel）」の，語彙を抜き出したヴァージョン（PB）とコンパクトにまとめたヴァージョン（PSh3）であると言える．

分量的に PSh3 は PB の 7 分の 1 であり，『現観荘厳論』の構造をまとめながらトピックを抜き出したものと思われる．PB との対応関係は今後精査する予定だが，恐らく PB は PSh3 がトピックとして挙げた語彙を解説した語義解釈集であると推測している．

それに従えば，先後関係は（先）PSh3 →（後）PB となる．

「“デルゲ法王の財務“という異名を持つカルマツェワン・リンチェンチョクドゥプ」に関しては，PGR の奥書の際に述べたいが，この人物が施主として印刷・発行したものであることがわかる．

2．2　＜PSh3＞

前項でも触れた PSh3 の奥書を見てみよう．

「オーム・スヴァースティ，仏教の心髄である三学を示す典籍である．デルゲの蔵（sDe mdzod）ツェワン・リンチェンチョクドゥプが，善く印刷したことにより，教

えと教えを保つものが隆盛し，いきものたちが資糧を円満にし，一切智を得るために回向しよう．

というこの跋文が般若（プラジュニャー pra dzny'a）の名のもとに書かれたのは善きかな．」（PSh3 255, 6-10）

「というこの跋文」以下が小字で書かれているため，写本自体の奥書に相当しよう．だが，この内容からは，パトゥルの著作であるか，聴聞録だったのかの区別もつかない．

ただ，「“デルゲの蔵”〔である〕ツェワン・リンチェンチョクドゥプ」は，先の PB の奥書のカルマツェワンと同一人物と見做して良いだろう．

パトゥル在世時（1808-1887）のデルゲ王は，現存する歴史文書などから第 43 代ツェワン・ドルジェリクジン（Tshe dbang rdo rje rig 'dzin），第 44 代タムチクドルジェ（Dam tshig rdo rje），第 45 代ロドープンツォク（Blo gros phun tshogs）のあたりであろうと推測される．この後，デルゲ王家に王子たちの王位争いが起こるが，王位を継がなかった方の王子ジャンペルリンチェン（'Jam dpal rin chen）に縁が深かったのが，パトゥルの友人で弟子でもあるカルマ派出身のジャムグンコントゥル（'Jam mgon kong sprul）や，前述した弟子のミパンら高僧達であった（小林 2011, 36）．

ジャンペルリンチェンの兄で王位を継いだ第 46 代ドルジェセンゲ（rDo rje seng ge）の代に 20 世紀に入り，ダライ・ラマ政権に臣従したこのデルゲ王とその王土も，激動の時代を迎える．

現段階ではデルゲ王統史を精査するに至っておらず，目にした限りの資料からはドルジェセンゲ（別名：ガワンロサン）までの王に「リンチェンチョクドゥプ」という名前は見当たらないが，この人物については次の PGR で掘り下げたい．

2．3　＜PGR＞

では，その『修習次第』（PGR）の奥書は，どう書かれているだろうか．

「非常に量り難い勝者の母〔の〕，ありのままの真意を註釈するには，比類のない聖者のお考えの『現観荘厳論』を誤りなくご説明なさっている，智者に従ってこれを書いた．ここで解釈していること〔で〕他の註釈の中で説明されていないものが，少しあるけれども，多くの智者の善説の中で間接的に示されていると思う．〔『現観荘厳論』以外の〕他の弥勒の法とも，善く合わせて考察して書いた．深甚なる大乗のこの法は対象としては危うく，法を自分勝手に捏造したことの，多くの過失が経の中で説かれているのが見えるので，そのようになってしまったら心の底から懺悔する．しかし，最上乗の深甚なるこの良き道に心から信解するので，経と論書〔といった〕典籍

の多くについて少し慣れ親しむために，実際の重要点に関しては矛盾がないことを確信している．このように書いた無量の福徳によって，地獄や餓鬼や畜生，阿修羅や，〔それらが生まれる原因である〕諸々の取悪趣を常に断じたことで，勝者・弥勒菩薩の足下に生まれるように．

『現観荘厳論』の真意を註釈するには，地上には匹敵するものがなく，閻浮提に太陽と月のように知られているアーリヤ・ヴィムクティセーナの真意をツォンカパ尊者が解釈した通りに〔それに〕従って，短い概論をこのように書いたなら，心のように慈愛ある縁者・朋友にも必要な段階になっているし，最上の守護者のお心にも適うことができるかなと思って，老犬アプが小さい森で修行の座の間に書いたものが，善く吉祥であれ．善し，善し，善し．

というこれも，デルゲ地方の大法王のお寺シュリー・ルンドゥプテンのギチューリンで，利他の善の種子を増大させるためにニェルパ（gnyer pa）のペマレードゥプが印刷した．」（PGR 226, 5-14）

2．3．1　ツェワン・リンチェンチョクドゥプ

ここで登場する「デルゲ地方の大法王のお寺シュリー・ルンドゥプテン」とは，恐らくサキャ派ゴンチェン寺（dGon chen dgon pa／Lhun grub sten）のことであろう．同寺は 17 世紀中葉の創建以後，デルゲにおける宗教的権威の頂点であり，王族内では世俗の王に加えて，ゴンチェン座主を継承するシステムが決まっていた．多くの場合，同世代の兄弟がそれぞれ王と座主を継承し（初期において王と座主は，叔父―甥関係），兄弟がいない場合は王自らが座主を兼任している（Cf. 小林 2011, 28）．

そうであるなら，パトゥル最晩年以後に王位を継承したと思われるドルジェセンゲの弟の，ジャンペルリンチェンがミパン達と親しかったことを想起すると，「ツェワン・リンチェンチョクドゥプ」というのは，王位争いの際にゴンチェン寺の支持も得ていた（小林 2011, 40）ジャンペルリンチェンのことではないかと筆者は推測する．

パトゥルの般若関係の 8 点の奥書の 2 点に「リンチェンチョクドゥプ」の名が現れるということは，この人物はパトゥルの施主か弟子筋ではないかと思われ，ジャンペルリンチェンであればまさに適合する．

デルゲに関して補足すれば，18 世紀初旬のデルゲ王テンパツェリン（bsTan pa tshe ring）はパルカン（par khang 経典印刷所）を建て，大蔵経印刷事業を展開しており，テンパツェリン始めデルゲ王はしばしば「法王（chos kyi rgyal po, chos rgyal）」と呼ばれている[9]．

王位争いをし，宗教的権威の絶大なる支持を得ていた王子が印刷発行の施主であれば，「法王の蔵」と呼ばれたというのも矛盾しないだろう．

ところで，筆者は PGR の和訳の際，ニェルパ（gnyer pa）に対し「お寺の経済を管理す

る僧」と補ったが（石川 2017,218,25），その後判明したところによると，ニェルパはデルゲにおいて政権運営の中枢たる高級官僚で，王の任命権すら持っていたようである（Cf. 小林 2011, 28, 8-10）．となると，PGR の奥書で「ニェルパのペマレードゥプが印刷した」という一文は，単に一寺の規模ではなく，デルゲ王国の肝いりであったことがより鮮明になるであろう．

翻って，奥書に記される mdzod「蔵」もしくは「財務」に戻れば，一寺の財産管理者ではなく，政権中枢にも関わる施主であると考えられるのではないだろうか．だとすれば，これも王弟ジャンペルリンチェンが「リンチェンチョクドゥプ」である可能性と矛盾はしない．

2．3．2　老犬アプ

パトゥルの『修習次第』については，既に訳註を著している（石川 2017）ので，内容に関しては繰り返さないが，今回判明したもう一つは「老犬アプ（khyi rgan a bu）」の意味である．石川前掲論文ではこれをパトゥルの謙称と見做したが，正確ではなかったため訂正したい．

「アプ」は先述したようにパトゥルの呼び名だが，「老犬」というのはパトゥルの単なる謙称ではなく「秘密の名前」であった．

パトゥルの師の一人，ド・ケンツェー・イェシェードルジェ（mDo mkhyen brtse ye shes rdo rje, 1800-1866）が，パトゥルに対しリクパ（rig pa）への「直接的な導き入れ」をおこなった際に，石で彼を打ちながら「**おい，お前，老犬！お前の頭はまだ概念でいっぱいなのだな！**」と罵った．その途端，パトゥルには何が起こったかがわかり，師に感謝しながら座を組み，広大で，自然成就し，雲ひとつない空のように澄んだ「原初の心」に安らいだ（Ricard 2017, 12-13），という．

このように「老犬」というのは，チベットでは一般的にひどい罵り言葉ではあるが，タントリストやゾクチェンパのように常識を破り，「風狂」の振る舞いをすることで真の心の姿に至ろうとする者達にとっては真逆の意味になり，これもまたド・ケンツェーから彼に与えられた親しみの籠った「イニシエーションで付けられた秘密の名前」となったのである．

パトゥルはその後，しばしば著作で「老犬」を自称しており，この PGR もまた真正の彼の著作であることを，この「秘密の名前」が明かしている．

2．3．3　修行の森

また「小さい森で修行の座の間に書いた」ことも記されている．

遊行の行者であったパトゥルは，様々な土地で請われて教えを説いたが，ゾクチェン寺

の上方に位置するルダム・ヤンエンのヤマンタカ窟や，反対側の斜面にあるツェリンプク（寿命窟）などにはしばしば，また長期間滞在したようである．このうち，ヤマンタカ窟では『クンサン・ラマの教え』を編集している[10]．

このヤマンタカ窟をはじめ，パトゥルの滞在地（修行，講義，おそらく著述も？行う場所）の多くが荒れ野であり，本来は人が足を踏み入れにくいヒマラヤの雪線付近（海抜5,000メートル）であるから，「森」はほぼないが，パトゥルの伝記ではっきりと「森」の記述があるのは，「アリの森（A ri'i nags）」と呼ばれる場所であり，ここには3年以上滞在している（Ricard 2017,64-66）．この地でパトゥルはロンチェンパ（Klong chen rab 'byams pa, 1308-1363）の三部作『三安息（Ngal gso skor gsum）』等の講義と修行指導をしている．この地は，やがてパトゥルを慕う人々が集まってきて，さながら修行村のようになっていったという．

「森」であること，また落ち着いて著述できた場所であることから，PGRの著述場所の候補にこの「アリの森」をあげたい．もしもそうであれば，『三安息』の講義と同時期に（その合間に）PGRは書かれた可能性もある．

この奥書によると，著述年代よりも更に後の話であろうが，この真正の彼の著作が先述したデルゲのシュリー・ルンドゥプテン寺，即ちデルゲ・ゴンチェン寺で印刷されたことが記されてもいる．つまり，手稿の奥書でパトゥルの著作であることが明記され，さらにそれを出版した際の奥書が末尾に付け加えられて，同書の誕生と流布（出版）の歴史を伝えている．

2．4　＜PShC＞

最後に，PShCを見てみたい．PShCは，そのタイトル『＜現観荘厳論＞〔の〕チューキギャムツォ尊者が書かれた第四章の概論の跋文』にあるように，パトゥルが他の人の著作に添えた跋文である．短い文章であることと，パトゥルの著述状況の参考にするため，奥書とともに全文を以下に和訳する．

「オーム・スヴァースティ．浄戒の蘊による美しい御身体〔と〕／定と慧の吉祥なる功徳による威厳〔をそなえ〕／無辺の有情の利楽の基となっている／牟尼（thub dbang）と〔その〕ご子息を／最上の尊重によって称賛いたします／

非常にはかり難いあらゆる勝者の仏母（＝般若経）〔の〕／真意を錯誤なく明確にする荘厳（＝『現観荘厳論』）の／第四章の概論の善説を／説いたり聴聞したり実践する教材（cha rkyen）として／工巧明の技術の知識から作られ／〔版木をもとに印刷することで〕一つのものが多く現れた〔その〕元々の底本〔である〕／善なる知性による牟尼の教え〔という〕蓮華の群生を／増大させる正しい発心の力によって作られ

た／牟尼の教え通りに努力し続けている／側使え（nye bar gnas pa）ロサンチューニー（Blo bzang chos nyid）と／匠の彫師〔である〕プラ父子（Bu lha pha bu）とともに／善なる思と加行を一つにまとめた／それは十万の月光のような無垢なる善を／一つに取り集めるような純白（＝純粋な善）の力によって／教と証の仏教の如意樹〔である〕／学問（bshad）と修習の必要なもの全てが完成しますように／この白業（＝清く善なる行い）に関わる主要なものたちによって／〔また〕生きものが残らず無辺の太陽光によって〔生まれた〕[11]／勝者の曼荼羅（＝完全な境地）は美しく心地よく／蓮華の中心から〔生じ〕最上の身を持つことができますように／不住不行（mi gnas mi sbyor）の勝者の母（般若経）の真意の大空〔には〕／境と有境の二顕現は微塵もない／無垢なる四加行の顕現を完成して／法身の勝者の地にすべて〔の有情〕も住することができますように／勝者に従う僧伽の集団／〔そのような〕どこかにいる〔僧伽の集団〕すべてが学んだ宝の／三学の良善なる行為が増大した力によって／輪廻と涅槃の善い資糧が増え広がるめでたさとなりますように／

（筆者注：以下，奥書：）『現観荘厳論』の註釈〔で〕チューキギャンツォペルサンポ尊者（rJe btsun Chos kyi rgya mtsho dpal bzang po）がお書きになった四章のこの概論は，ダツァンリンポチェ〔寺〕で書物が入手し難いことに対して益すると思って，大量の学説に精通した論者の学者ロサントゥプテン（Blo bzang thub bstan）がご発心なさって，出版するとき短い跋文を書いてくれ，と頼まれた通り，説法者の姿をしているペルゲー・アプ（dPal dge a bu）と呼ばれている者が，テクチェンタルゲーリン（theg chen dar rgyas gling）の法堂（chos grwa）で書いたものが，善にして吉祥でありますように．善し，善し，善し」（PShC 87, 14-20）

タイトルと奥書にあるチューキギャンツォペルサンポだが，この人物に関しては，アムドの仏教興隆に貢献したゲルク派のケルデンギャンツォ（sKal ldan rgya mtsho, 1607-1677）の全集に，彼の伝記がある[12]．

その伝記によると，丁未（me mo lug）の年に生まれている．チューキギャンツォは晩年ツォンカパ（1357-1419）に長寿祈願の加持を受けたようだが，ほどなく亡くなったようであるから，ツォンカパと同時代人だとすれば，この丁未は 1307 年 , 1367 年の何れかと考えられる．65 歳の乙亥（shing mo phag）に亡くなったと言うので，乙亥は 1335 年 , 1395 年のいずれかであろうが，生年との整合性が取れない．功成り名を遂げた高僧であれば，この没年齢と干支を正しいと見做しても良いだろう．そう仮定するなら，歿年は 1395 年で，64 年前（数え年などを考慮）の 1331 年，lcags lug（辛未）を生年とするのが妥当なのではないだろうか．

ともかく，チューキギャンツォがツォンカパと親しいゲルク派の高僧であることははっ

きりした.

彼の『現観荘厳論』註はTBRCにも残されておらず確認できなかったが，ゲルク派の僧侶の『現観荘厳論』註に対して，パトゥルが跋文を書いたことは大いに意味がある.

パトゥルには，実際にアラク・ドゥガク（'Ja' pa mdo sngags rgya mtsho, 1824-1902）という，ゲルク派の大学者で，グンタン・ジャンペーヤンと称されるグンタン・クンチョク・テンペードンメー（Gung thang dkon mchog bstan pa'i sgron me, 1762-1823）の転生者で，アムドのラプラン寺の僧院長である弟子がいるが，彼はゲルク派の転生活仏ながらパトゥルに教えを乞いに来ていた.

ただ，彼がパトゥルの伝記の中で有名になるのは，ミパンとの論争のエピソードに登場するからで，それは必ずしも彼にとって名誉な挿話ではない.

というのも，ミパンは『中観荘厳論』の註釈書を書き，ツォンカパ批判をしたことで有名だが，同じパトゥルの弟子とはいえ，ゲルク派のアラク・ドゥガクはその批判を受けて立ち，ミパンに論争を挑んだのである．パトゥルは，その際の判定者を依頼されている.

パトゥルやミパンの伝記には，両者の議論の内容より，ミパンの念持仏の文殊像が奇瑞を起こし，ミパンの心臓と文殊像とが光線で結ばれたエピソードを華やかに描写している（Ricard 2017, 114-115）．結局，パトゥルも判定を放棄し勝者の名を口にはしなかったものの，「起こった現象が勝者を示しているのではないか」と暗にミパンの勝利を認めている.

そして，アラクにはパトゥル自身がド・キェンツェーに言われたのと同様の「頭にいっぱい詰まった概念を手放せ」と教えさとしている（Ricard 2017, 115）.

グンタン・ジャンペーヤンも言わばゲルク派にとっては「文殊の化身」のような存在であり，その転生者と，ニンマが誇る「文殊の化身」の化身対決ともいうべきエピソードであるが，勝敗はともかく，アラクが大学者であったことは間違いない．彼の弟子にはドドゥプチェン3世（rDo grub chen 'jigs med bstan pa'i nyi ma, 1865-1926）始め，のちにドドゥプチェン寺の学匠となる僧達が多数いる．というのも当時，ニンマの名刹ドドゥプチェン寺では，顕教の学習をゲルクの教科書でゲルクの学僧から習っていた[13]からである.

他に，ミニャク（Mi nyag）のクンサンソナム（Mi nyag Kun bzang bsod nams / Thub bstan chos kyi grags pa, 1823-1901）もゲルク派の大学者だが，パトゥルの旅に何年も付き従ったごく近い弟子の一人である.

このようにパトゥルには，志ある僧達が宗派を問わず集まってきていた．しばしば，ニンマ派とは相容れないように言われるゲルク派であっても，例外ではない.

さて，ここに「テクチェンタルゲーリンの法堂」が登場する．パトゥルの伝記には「タルゲーリン」というカム地方にあるゲルク派の僧院のエピソードが説かれる．ミニャクへの旅の途上でパトゥルは何度か通りかかっており，リメーを標榜するパトゥルと，この僧

院の一部の派閥主義の僧との対話のエピソード（Ricard 2017, 30-31）や，みすぼらしい姿で放浪するパトゥルをニンマ派の僧だと考え「あなたは何処から来て，どこへ行くんです？」と尋ねた際のエピソード[14]が登場する．

ゲルク派のチューキギャンツォがアムドと関わりが深い人物であること，ミニャクとアムドは近いことなどから推定すると，この 「タルゲーリン」は奥書を書いた「テクチェンタルゲーリン」であろうか．

そうであれば，ゲルク派の学者の『現観荘厳論』第四章の註釈を，学僧たちの教材用に印刷発行する際に，跋文を書くほどパトゥルはゲルク派にも信頼されていたと言えるし，「テクチェンタルゲーリン」がゲルク派以外の寺院であっても，パトゥルがゲルク派の学者の『現観荘厳論』註の跋文を書くことに何の違和感も持たれていなかったことがわかる．

跋文を依頼したロサントゥプテンに関しては，同名の人物が何人か存在するため現段階では特定できていないが，彼が所属していた寺院が判明すれば，「テクチェンタルゲーリン」がどこかはっきりすることだろう．

3．まとめ

PB と PGR の先後については，未だ明確にはなっていない．

しかし，明らかになったこともあった．PSh3 と PB の先後は，恐らく PSh3 が先に作られ，この中の語彙を解説したものが PB であろう．

当時のパトゥルをめぐる状況として，ゲルク派の高僧達が何人も弟子におり，ゲルク派の高僧の『現観荘厳論』註の跋文を乞われるほどであったことは確かである．

また本稿の考察とは直接関係しないが，パトゥルがミパン等の弟子を通じてデルゲ王家に，著作の印刷出版の後援を得ていたであろうことも推測できた．その一人は，第 45 代デルゲ王の弟のジャンペルリンチェンであった可能性があることも述べた．

また，PGR を著作した「森」が「アリの森」である可能性も指摘することができた．もしそうであれば，ロンチェンパの『三安息』の講義の合間に著作した可能性もある．

今後も全集所収の著作や聴聞録の奥書を丁寧に辿ることで，彼の著作年代や活動状況を探るとともに，先述したように『現観荘厳論』「中」註釈を和訳註解し，その内容から著述作品の先後を推定し，ツォンカパの思想に対する彼の見解や影響を読み取っていきたい．

****

1　パトゥル・リンポチェの略伝を紹介する．（dpal の発音は地域によって「パル」「ペル」等になるが，日本では慣例的に「パトゥル」と呼んでいるため，名称に関しては「パトゥル」で統一する．）

ザ・ペルゲー・トゥルク（rDza dpal dge sprul sku）であるゾクチェン・パトゥル・リンポチェは，戊辰年（1808）にカム地方のゲツェ・ザチュ（メコン川上流）で生まれた．ドドゥプチェン・ジクメ・ティンレーウーセル（rDo grub chen Ⅰ：rDo grub chen 'jigs med phrin las 'od zer, 1745-1821）が，ペルゲー・サムテン・プンツォク（dPal dge bsam gtan phun tshogs）のトゥルク（転生者）として認定．オギェン・ジクメ・チューキワンポ（O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po）と名付けた．幼い頃から読み書きが難なく出来たという．戒師・シェーラプサンポ（mKhan shes rab bzang po）のもとで出家．ドラ・ジクメ・ケルサン（rDo bla 'jigs med skal bzang）などのもとでロンチェンパ（1308-1363）の『ゲルソーコルスム』とシャーンティデーヴァの『入菩薩行論』，根本タントラである『サンワニンポ』など顕密の典籍を学んだ．この他，ニンマ派だけでなく，サキャ派，カギュー派，ゲルク派等，一つの立場に拘らずあらゆる教えを聴聞した．のちに彼が請われて講義する際には，サキャの寺ではサキャ派の高僧達を，ゲルクの寺ではタルマリンチェンを，というように場所に応じて引用を自在に変えて説き分けた．ジグメ・ギェルウェー・ニュグ（'Jigs med rgyal ba'i myu gu = Kun bzang bla ma）から，ロンチェン・ニンティクの前行のガイダンスを25回聴聞し，実際に行じてすべてを完成した．ド・ケンツェー（mDo mkhyen brtse ye shes rdo rje）によってリクパを直接に示され，その後はルダム・ヤンエンにあるヤマンタカの洞窟やツェリンプク（寿命の洞窟）等，ゾクチェンの寺に滞在し修行に励んだ．

30代からセルタル・ヤルルン・ペマクー（gSer thar yar lung pad ma bkod）等で，『サンワニンポ』や『入菩薩行論』，弥勒の五法，中観，阿毘達磨の講義を行う．毎年，『入菩薩行論』の解説をすると，チベットではあまり見ないような30や50の花びらを持つ大きな黄色い花が沢山咲いたことで，この花が「入菩薩行論の花」として有名になった．その後，ザ・ギャル寺（rDza rgyal dgon）の近くに寺院を建立．丁亥歳（1887）のサカダワ（チベット暦４月．西暦６月）18日に示寂．肉体が完全に法界に溶け込んだと言われる．Cf. 石川2017, 218, n.1.

2　この三部の註釈書は現在でも，ニンマ派の僧侶が般若学を学ぶ際のテキストとなっている．Cf. 石川2017, 218, n.1.

3　石川 2016参照.

4　NTD 3, 12-15，Ricard 2017, 25，Cf. 本稿 n.1.

5　石川 2016, 105, 13-15．ミパンは科文に関してパトゥルの『概説』（PP）ではなく，科文集であるPSに添って，自らの科文集を構成している．

6　若い頃，彼は名を聞かれて「アプ　ウロ（a bu ullo）」とパトゥルの家族の呼び名で答えている（Ricard 2017, 7, 23-25）．「アプ」は神田須田町にあるポタラ・カレッジ講師のガワンウースン権田氏によると，「息子」だが「愚童」の意味であるという．

7　「財務という名を持つ（mdzod ming ’dzin pa）」の訳は，ガワンウースン権田氏のご助言をいただいた．この他にも，和訳に際して多くのアドバイスを受けた．この場を借りてお礼申し上げる．

8　PSh3 230, 3-4: ’dir shes rab kyi pha rol tu phyin pa’i bdus ’grel cung zhig bkod na /

9　18世紀から20世紀のデルゲ王国並びに王統史と，ダライ・ラマ政権や清朝との関係は，小林 2011を参照されたい．

10　『クンサン・ラマの教え（*sNying tig sngon ’gro’i khrid yig kun bzang bla ma’i zhal lung*）』奥書より（PSB Vol.7, 560, 16-18），Cf. Ricard 2017, 12, 24-30.

11　「生きものが残らず無辺の太陽光によって（'gro ba ma lus ’od snang mtha’ yas kyis）／」は，前の偈の「月光」との対句であろう．また ’od snang mtha’ yasは阿弥陀如来のことである．文脈から（後続の rgyal ba 勝者との関係で），この箇所は阿弥陀如来であるのは不適切だが，後の偈の「蓮華の中心から〔生じ〕最上の身を持つことができますように／」という祈願に向かう連想になっていると思われる．

12　TBRC https://www.tbrc.org : rje btsun chos kyi rgya mtsho dpal bzang bo'i rnam thar / 134-148.
skal ldan rgya mtsho, ngag dbang 'phrin las rgya mtsho; gsung 'bum/_skal ldan rgya mtsho/;

W2DB4601, p. 134. kan su'u mi rigs dpe skrun khang, lan kru'u. 1999. rje btsun chos kyi rgya mtsho dpal bzang bo'i rnam thar/

13　中沢中「幻の本質 ―『中観荘厳論』63偈」, https://core.ac.uk 身延山リポジトリ 184, n.128.

14　この時パトゥルは，「ゲルクの僧達はよく勉強するね．そして中央チベットと（東のカムとを）行き来し続け，必ず戻ってくるんだな」と答えている．それを「良いことを言うな」と考えた一人がゲシェにその話を告げると，ゲシェはパトゥルの言葉の本質を悟り，「良いことなものか！彼が言ったのは，ゲルク派は行ったり来たりするだけで永遠に輪廻から出ないが，彼らニンマ派が言うところのゾクチェンの修行は，決して輪廻へ戻ってこない境地を得る，と言っていたのだぞ！」と弟子達に説明した，という（Ricard 2017, 47-48）．

これらのエピソードは，パトゥルの立場とゲルク派に対する見方をよく表わしている．彼は「どの宗派に属しているか」と聞かれれば四大宗派の名をすべて挙げるし，「どの学派の系統なのか」と尋ねられれば「仏陀の学系だ」と答えている（Ricard 前掲書 31）．ゲルク派の学僧達が勉強熱心であることは認めているし，ゲルク派の才能豊かな弟子達を抱えてもいるが，パトゥルにとっては，（かつての自分同様）概念でいっぱいになった頭では，仏教の本質である「輪廻からの解脱」に程遠い，と考えてもいたようである．

【略号】

AV　Ārya Vimuktisena. *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa.* D 3787, Sher phyin, ka 14b-212a7

BV　Bhadanta Vimuktisena. *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi tshig le'ur byas pa'i rnam par 'grel pa.* D 3788, Sher phyin, kha 1b1-181a7

D　sDe dge 版西蔵大蔵経（番号は宇井伯寿等編 1934『西蔵大蔵経総目録』仙台 による）

LRB　Tsong kha pa. *Byang chub Lam rim che ba.* lHa sa Zhol Edition. 1a1-523a4.（『菩提道次第大論』）

LRS　Tsong kha pa. *sKyes bu gsum gyi nyams su blang ba'i byang chub lam gyi rim pa bzhugs so.* ba. lHa sa Zhol Edition. 1a1-201b3.（『菩提道次第小論』）

MNg　Haribhadra. *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan zhes bya ba'i 'grel pa.*（『小註』）D 3793, Sher phyin, ja 78b1-140a7

MS　Mi pham rgya mtsho. *Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi mchan 'grel puNDa ri ka'i do shal bzhugs so.* 'Ju mi pham rin po che 'i gsung 'bum 16. [s.l.]: 'Jam dpal d+hl [sic.] yig ser po'i dpe skrun tshogs pa: 2006.

NT　*O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po'i rnam thar dad pa'i gsos sman bdud rtsi'i bum bcud ces bya ba bzhugs so* in PSB（vol. 1）, pp.1-87.（『伝記』）

NTD　*O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po'i rnam thar mdor bsdus* in PSB（vol. 1）, pp.1-7[sic.].（『小伝』）

PB　*Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi 'bru 'grel* in PSB（vol. 5）, pp.1-180.

PGR　*Sher phyin rgyan gyi spyi don bsgom rim nyung ngu gzhung lugs legs bshad bzhugs so* in PSB（vol. 5）, pp.184-226.（『修習次第』）

PJ　Śāntideva. *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa.* D 3871, dbu ma, la, 1b1-40a7（『入菩薩行論』）

PP　*Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi spyi don* in PSB（vol. 4）, pp.1-490.（『概説』）

PS　*Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi Sa bcad* in PSB（vol. 2）, pp.244-261.

PSB　O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po. *dPal sprul o rgyan 'jigs med chos kyi dbang po'i gsung 'bum bzhugs so.* Si khron mi rigs dpe skrun khang : 2009（8 vols）.

PShC　*Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi 'grel pa rje btsun chos kyi rgya mtshos mdzad pa'i skabs bzhi pa'i spyi don gyi spar byang* in PSB（vol. 3）, pp.86-87.

PSh1　*Sher phyin skabs dge 'dun nyi shu'i zur bkol* in PSB（vol. 5）, pp.181-183.

PSh2　*Shes rab bsdus pa'i sdom byang* in PSB（vol. 5）, pp.227-229.

PSh3　*Shes rab bsdus 'grel nyung ngu* in PSB（vol. 5）, pp.230-255.

TsL　Maitreya. *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan zhes bya ba'i tshig le'ur byas pa.* D 3786, Sher phyin, ka 1b1-13a7.『現観荘厳論　摂頌』

【参考文献】

Brunnhölzl, Karl 2012　*Groundless Paths: The Prajñāpāramitā Sūtras, The Ornament of Clear Realization, and Its Commentaries in the Tibetan Nyingma Tradition.* Ithaca: Snow Lion.

Duckworth, Douglas S 2011　*Jamgön Mipam: his life and teachings.* Boston & London: Shambhala.

Lama Yongden 2000　*Mipam[sic.]: the first Tibetan novel.* Berkeley / Hong Kong: SLG Books.

Pettit, John W 1999　*Mipham's beacon of certainty: illuminating the view of dzogchen, the great perfection.* Boston: Wisdom Publications.

Ricard, Matthieu 2017　*Enlightened vagabond: the life and teachings of Patrul Rinpoche.* Boulder: Shambhala.

Sparham, Gareth 2008-2013　*Golden Garland of Eloquence: Legs bshad gser phreng* by Tsong kha pa, 4 vols, California, Jain Publishing company

石川美惠 2016 「オギェン・ジクメ・チューキワンポの『現観荘厳論　概説』について」『印度学仏教学研究』65-1. 日本印度学仏教学会．102-108.

―― 2017 「パトゥル・リンポチェの『修習次第』試訳」『東洋学研究』55．東洋大学東洋学研究所．195-221.

―― 2018 「オギェン・ジクメ・チューキワンポの *bsGom rim nyung ngu* について」『印度学仏教学研究』55．日本印度学仏教学会．195-221.

金倉圓照 1979 『悟りへの道』平楽寺書店

小林亮介 2011 「19世紀末～20世紀初頭，ダライラマ政権の東チベット支配とデルゲ王国（徳格土司）」『東洋文化研究』．21-52.

田中公明 2014 『「般若学」入門』大法輪閣.

ツルティム・ケサン，藤仲孝司 2005 『悟りの階梯』UNIO

―― 2014 『菩提道次第大論の研究Ⅱ』UNIO

兵藤一夫 2000 『般若経釈　現観荘厳論の研究』文栄堂書店

真野龍海 1972 『現観荘厳論の研究』山喜房仏書林

―― 1992 『般若波羅蜜多の研究』山喜房仏書林

＜キーワード＞

パトゥル・リンポチェ，現観荘厳論，ツォンカパ，ミパン